記憶からたどる西国街道とともに暮らす生活の移り変わり

松村　暢彦[1]・若本　和仁[2]・小幡　正裕[3]・黒須　仁美[4]・田名部　佳子[5]

[1]正会員　大阪大学大学院准教授　工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻

（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1）
E-mail:matumura@mit.eng.osaka-u.ac.jp

[2]非会員　大阪大学大学院准教授（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1）
[3]非会員　大阪大学大学院工学研究科博士前期課程（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1）
[4]非会員　大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2）
[5]非会員　大阪大学大学院医学系研究科博士前期課程（〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2）

地域計画は将来に向けて行う行為ではあるが、現在、過去と無関係に存在するものではない。将来は過去から現在に至る時間のなかでその地域で積み重ねられてきた暮らしの蓄積の上に成立する。しかし現在の計画立案プロセスにおいて統計資料を用いた過去から現在までの社会経済状況の傾向は把握することはあってもその地域で営まれてきた暮らしを把握することはない。そこで本研究では、大阪府箕面市を横断する西国街道をケーススタディとして、沿道住民の方々のそこでの暮らしを戦前から現在に至るまでの記憶をヒアリング調査でたどりながら発掘する。この実践を通して、オーラルヒストリー研究の土木計画学への応用について考察する。

Key Words : *times, italic, 10pt, one blank line below abstract, indent if key words exceed one line*

1.　はじめに

「住民参加のまちづくり」ほど近年使われている言葉はないであろう。全国のいたる所で、福祉、景観、交通、環境など様々な分野のテーマで地域住民を集めてまちあるきをし、そのあとファシリテーターが「今のまちのいいところと悪いところをあげてください」「どんなまちにすみたいですか」「どんな暮らしがしたいですか」という投げかけでもって住民の意見を徴収する。そのなかからあらかじめ用意していた回答らしき言葉をみつけてそれを文章にあてはめ、住民参加のまちづくり計画とする。うわべだけの投げかけの言葉からはうわべだけの答えしか返ってこない。そんな言葉をもとにした計画づくりにどんな意味があるのだろうか。むろん、そんな住民参加のまちづくりばかりではない。私事は顧みずまちのために尽力し、まちのためのよき実践者として活動されている事例もある[1)]。そのような例では活動されている方々の間に、その地域で暮らすあるべき生活像、あるべき態度が共有されているように思う。前者の住民参加のまちづくりでは、あるべき生活像を恣意的にピックアップしたに過ぎないが、後者では各々のあるべき生活像の最小公倍数として活動を実践していくとともに、あるべき態度の最大公約数を大きくしていく姿勢を読み取ることができる。別の言い方をすれば、自分が真に求めている暮らしを考えていくなかで、自分の暮らしは単独で成立するものではなく地域の自分たちの集合体の生活像を考えていくことが重要であり、そしてその実現のためには地域のよき暮らしの意識の共有が求められている。

地域のあるべき態度の共有について考えてみると、様々な文献で個人主義、近代主義が浸透する以前の集落に住む人々の心根の美しさや親密なコミュニティの形成にポジティブな評価を与えている。このようなことからもっと過去のその地域の暮らしを尊重することが必要とされるのではなかろうか。計画は将来のことをあらかじめ考える行為ではあるが、将来は過去から現在に至る時間のなかでその地域で積み重ねられてきた暮らしの蓄積の上に成立する。将来は現在の延長上であり、現在は過去の延長上にあるという事実に意識をむけることが必要である。そのうえで、これまでの地域の暮らしをならしめてきたしくみを理解する、そしてそのうえでしくみをどう変えていくべきなのかを考える姿勢を要求しているものである。「つくる都市計画からなる都市計画」はこの意味で理解する必要がある。

一般的な知識として、昔の村の暮らしを知っていても、

重要なのはそこの地域の暮らしであり、それは残念ながら地図も記録も残されていないのがふつうである。そこで、地域の人々が体感してきた、主観的な地域の記憶を調査していくことで、地域のあるべき生活像、態度を共有する取り組みが必要とされる。

本研究ではそのような問題意識のもと、大阪府箕面市を横断する西国街道をケーススタディとして、沿道住民の方々のそこでの暮らしを戦前から現在に至るまでの記憶をヒアリング調査でたどりながら発掘する。この実践を通して、オーラルヒストリー研究の土木計画学への応用について考察することを試みる。

2. 調査地区の概要

(1) 調査対象地区の概要

旧西国街道は西宮市から京都市東寺口までの街道で、現在の国道171号とほぼ並行して走っている。この道は山崎道とも呼ばれており、西宮から下関へ続く道を山陽道、さらに九州へ続く道を総称して西国街道と称している。この西国街道は、古代から京都と西国を結ぶ重要な道であり、江戸時代には本街道である大阪経由よりも距離が短いので、西国諸大名の参勤交代の道として多く利用されていた。近世以降も京都と神戸を結ぶ幹線道路して位置付けられ、昭和初期に失業対策もかねてバイパス道路を集落を避けて国道171号として整備された。昭和50年代以降はモータリゼーションの影響を受けて、国道171号に大型郊外店舗が数多く出店していくなかで、旧西国街道は住宅地として開発されていった。現在では旧街道の面影を活かした修景整備がなさている（**写真-1**）。

調査対象地区は旧西国街道のなかでも箕面市小野原地区で、大阪万博記念公園から約4kmにあり、大阪万博が開催された1970年前後で大きくまちのかたちが変容した地域である。

写真-1　現在の西国街道

⑵ 実践の方法

本実践は工学研究科大学院修士課程1年次１学期に配当されている「リノベーションまちづくりデザイン」という演習で取り組んだ。本演習の特徴は、４名程度のグループに分かれたグループ作業である点とさまざまな専門分野を背景にした学生が集まる点にある。われわれのグループは旧西国街道をフィールドとして「地域の持続とまちづくり」というテーマからグループディスカッションを通して課題を掘り下げていった。学生メンバーの専門領域は、建築工学、社会学、地域福祉学と多様性に富んでいる。西国街道のフィールド調査を通してお互いの問題意識を共有していった中で、コミュニティ、人々の関わり・関係性など人を通して西国街道を読み解いていくことにグループの課題設定をしていった。

そこで西国街道の沿道で暮らしてきた人へのヒアリング調査を実施することで、人々の生き方、生活と西国街道の変化の関係性を考察することとした。調査にあたってはグループの学生の一人が借りている大家さんとその幼なじみ一人にアポイントを取って調査を実施することになった。調査は、2009年6月26日（13時～14時40分）、2009年7月5日（14時～16時20分）の2回、対象者の自宅で実施した。内容については、インタビュー参加の同意書を取った後に西国街道とかかわる生活の記憶についてヒアリングを行っていった。

調査対象者の属性は**表-1**に示すとおりでいずれも小野原地区で生まれたのち、継続して暮らし続けている男性と女性である。職業は農業をされている。

3. 調査内容

(1) 生活空間の変容

西国街道の生活空間は、社会経済状況の変化を受けて大きく変わっていった。1968年にアスファルト舗装化されており、それ以前と以後の商店の移り変わりを示したのが**図-1**である。1968年以前では西国街道周辺に多くの商店が集積していた。業種も多様で、魚屋（茨木から運んできた）、肉屋、豆腐屋、干物屋、酒屋、駄菓子屋、ほかに地元で百貨店と呼んだよろず屋など日常買い回り品があり、日常生活の買い物はここですべて揃えること

表-1　対象者の属性

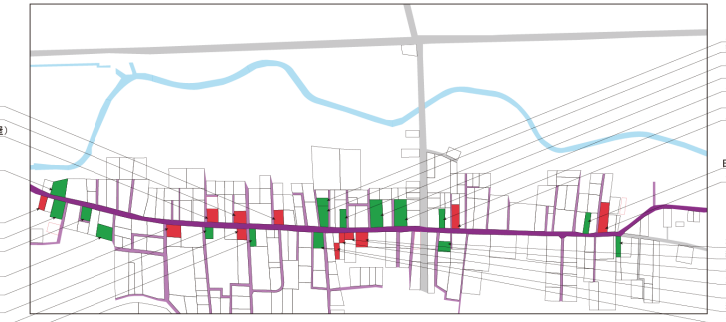
	A氏	B氏
性別	女性	男性
年齢	76歳、昭和７年（1932年）生	88歳、大正９年（1920年）生
生い立ち	小野原	小野原
職業	農業	農業

商店の変遷

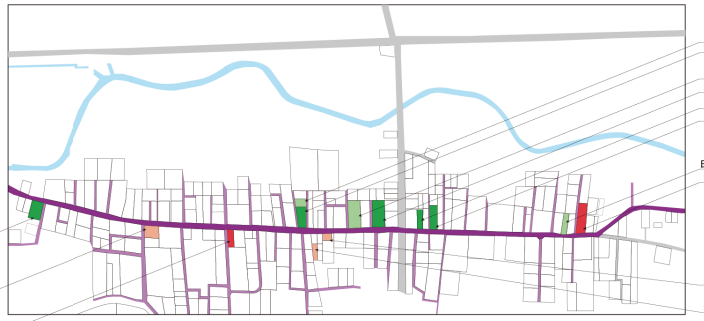
凡例
- 商店（食料品系以外）
- 商店（食料品系）
- 商店（チェーン店等）

1968 年以前から現在（2008 年）に至るまでの商店の移り変わりを示したものである。1968 年、1968 年以前では西国街道周辺にまだ商店があったことがわかる。また、肉・野菜などの食料品系の店も多く存在していた。しかし、現在では、多くの商店が 171 号線に立ち並んでおり、西国街道沿いではほとんど商店はなくなってきている。

Scale 0m 50m 100m



1968 年以前



1968 年

現在（2008 年）

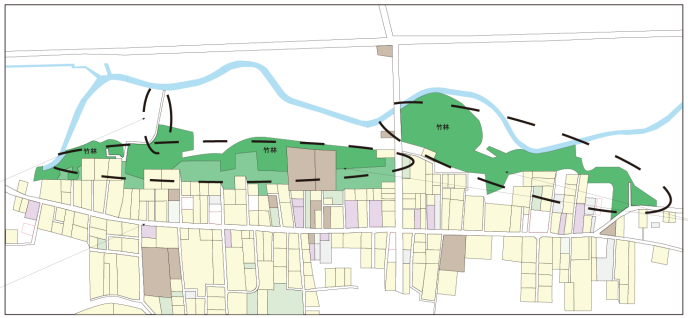
土地の変遷

凡例
- 竹林・田んぼ等（緑関係）
- 公共施設・神社・寺
- 住宅
- 商店
- 駐車場・倉庫
- アパート等
- 工場

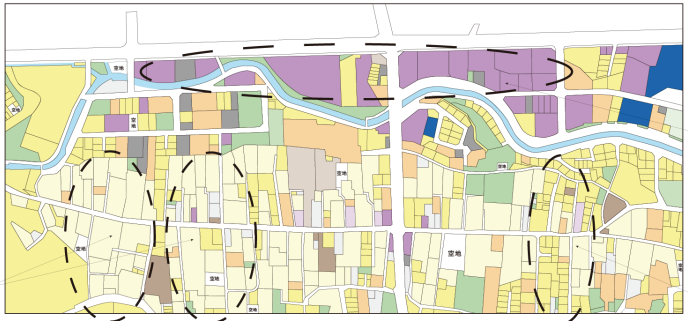
1968 年から現在（2008 年）に至るまでの土地の移り変わりを示したものである。1968 年では西国街道と 171 号線の間に竹林、畑、空地が多く存在していたことがわかる。1968 年では個人住宅が多かったが、現在では、アパートが増えていることも特徴にあげられる。

Scale 0m 50m 100m

1968 年以前



1968 年



現在（2008 年）

が出来た。また、農機具の修理を請け負った鍛冶屋、瓦屋、墓石の石材屋など生活を支える店、さらには銀行（西宮銀行）の支店もあった。

万博の頃になると、昔は野菜は自給自足であったのが、非農家の世帯が増えてきたことで、八百屋ができている。その一方で、日常買い回り品は茨木や千里に買い物に行くように店舗が減少していった。この頃の買い物手段は自転車もしくは徒歩で、買い物に自動車を使う世帯はみられなかったという。新たにできた店舗としては、クリーニング屋や新聞屋など新たな生活サービスを担う店舗が出始めた。

現在では、日常買い回り品を扱う店舗は、わずか1軒だけ食品・酒屋を兼ねた店舗が残る一方で、散髪屋やクリーニング屋がさらに増えている。日常的な買い物は車に頼る生活を送っている。特に万博以降4車線に増えた国道171号沿道にモータリゼーションの進展とともにチェーン店が増えていくことになった。周辺の人々にとって旧西国街道の店も残っている店は代替わりをしたりしてなじみも薄く、国道沿道の店舗はなじみがないので、車で茨木や千里に車で買い物にいくことが多い。

(2) 土地利用の変容

1968年以前は旧西国街道と国道171号の間に竹林、畑、空き地が多く存在していた。箕面川ぞいの低いところは水田（この周辺の土地は粘土質で米の質が高く、多くは酒米を栽培して茨木市奈良の酒蔵におろしていたそうである）、水がないところは畑にして野菜をつくったり、柿やびわ、ももを植えて、それもできない所は竹林にしてタケノコをとるといったように、地形を上手に利用した合理的な土地利用がなされていた。米つくりは12月にまとまった収入があるがそれ以外は現金収入がないので、春はタケノコ、夏はびわやもも、秋は柿といったように現金収入の道を確保していた。農閑期には近くの山林に薪とりにいったり、炭に焼いたりして、それも現金収入源の一つになっていた。里道が竹林を抜けて箕面川につながっており、そこで洗濯をしたり、ウナギをとったり、子どもの夏の遊び場になっていた。里道の幅も荷車が徹幅として整備されており、これは火災など緊急事態が発生してけが人がでたときに雨戸をはずして担架がわりに人をのせて運び出すことができるように配慮さいていた

表-2 対象者の話の内容

対象者の概要	A氏	B氏
1920年～ 乳幼児期 学童期 満州事変： 1931年	・小野原で生まれる。一人っ子 ・川遊びなど危険な遊び。遊びの中で、一度は死にかけるのが普通。 ・一人っ子なので親から家事の要望のメモをうける。水汲み等。 ・兄弟がいないため、遊び仲間を作るのが大変だった。 ・婚約者は決められていた。 ・自転車は高級品。	・小野原で生まれる。5人兄弟 ・長男。時代背景および両親からの期待を受けて育つ ・長男なので牛乳を飲む ・長男以外の男児は、婿養子に入るのが普通だった ・兄弟の仲でもまれて育つ。殴る、慰める、遊ぶ、喧嘩する、という多様性。 ・満州事変の記憶が鮮明。景気が悪く、軍が動く。
成人期 万博 (1970年)	・子育て。姑にあれこれ言われる。あれこれ言われたことを聞いて行動した。 ・農業。主に米。その他びわ、もも、おかき等。 ・西国街道の変化が急激になる ・西国街道の変化が急激になる。バブル。アスファルト、ガスの開通。 ・日常がめまぐるしく回転。 ・土地を手放す農家が増えた ・家がたくさん出来た ・なじみの人たちがすくなくなっていった	・農業。主に米。その他びわ、もも、おかき等。 ・171号線は失業対策に行われた ・祭りがあった。鶏肉など肉を処理し、食べる。秋の村祭り。 ・**生きがいがあった** ・お互い生きていく以上は、つらいから、何とかして明るく、楽しくしようとした。 ・情報屋や乞食もいた。乞食は差別や搾取される対象ではなかった。誰が存在しても、共存できていた。 ・パンは高級品。茨木でしかなかった。 ・西国街道の変化が急激になる。バブル。アスファルト、ガスの開通。 ・日常がめまぐるしく回転 ・土地を手放す農家が増えた ・家がたくさん出来た ・なじみの人たちが少なくなっていった
老年期	・息子夫婦および孫と同居。 ・今の人は干渉するのを嫌がる。 ・年寄りの知恵は確かにある。しかし、若者は年寄りの知恵を嫌がる。 ・一人の子どもに親と年寄りがよってたかる。 ・**話せる人が減っていく**。 ・若い人と**話すと楽しい**。 ・脳を活性化することが健康の秘訣。 ・新しい人たちが(学生等)来ることも去ることも、良くも悪くもある。	・兄弟のうち2人死別。3人生存。 ・兄弟は多いほうがいいと思う。 ・息子夫婦および孫と同居。 ・**今は生きがいなどない。物がありすぎて感動しない。** ・挨拶くらいしてもいいやん。挨拶もしないんか、と思う。 ・**これからの西国街道は**、ほとんど変化して名残はないが、**愛と人情**があるものであってほしい。 ・**(若い人と)話すのはいいもんや。**

という。

この周辺においては万博の影響は大きく、小野原の住民も土地をハウスメーカーに売って住宅を建て、農業をやめた人が多い。これは西国街道の沿道からみると裏側に当たる、以前は竹林や畑になっていたところに住宅を建てた。また旧西国街道の沿道の土地も分割され建物も敷地も減少しつつある。

(2) 地域住民の意識の変容

昔は地域の建築業者が家を建てていたそうであるが、万博以降はハウスメーカーによる画一的な家が増加し、それとともに生活様式が変わっていき、生活様式だけではなく、性質まで変わっていったと語っている。

*『この辺は千里ニュータウンで、えらい、そら、急激に変わってきたんです。家が変わった、建てるということと同時に、生活様式も変わりましたね。そら、もう、家も生活様式も、何もかも。人間の、もともとの、生まれつきの素質まで変えてしもうたですから。それで、あの一、**よき田舎の人**というのは、だんだんだんだん、都会人になっていくんです。だから、もう、今は、もう。おー、田舎の･･･良さというものはほんとないですね。感動しなくなった。うんほんと。もう、今は。』*（下線部は著者）

ここで注目すべきは「よき田舎の人」という表現である。宮本常一は「よき村人」という言葉を用いて、以下のように示している2)。

『かつてのよき村人といわれるものは先ず何よりも村の風をよく理解してこれに従うことであった。つまりその村の色に最もよく染まることであった。これは一見自らの個性をなくするように見えるけれども、それによってむしろ個性が活かされもしたのである。村人として共通のものを持ちつつ、十人集まってみれば十人十色であった。そして家々の風というものは皆少しずつ違っていた。村人としてはそういうことを知りつくしていないと新しい改革も新風の移入ももとは出来難かった。どこかに無理があった。』

昔は組で村の様々なことを情報交換をしながら相談して決めていたらしい。たとえば柿を植える家、桃を植える家などどの畑に何を植えるのかも相談しながらきめていたそうである。地域全体で生活を良くしていこうとした共同体の意識が色濃く反映したしくみであるといえよう。また、昔の子育てと今の子育てを比較して、昔は姑の言いつけをまもってこなすのが通常であったそうだが、どこの子どもも区別なく地域でしかったりしていたが、今は親の気持ちを殺して子どもを優先させたり、地域の人はもちろんのこと自分の親にも口出しを拒んだりするといったように、昔の人の知恵や観をないがしろにするといった表現で断片的によき村人について語られていた。

(3) コミュニティの変容

昭和初期から昭和20年代頃までは密なコミュニティが存在していた。その実態は祭りの語りの様子からも伺うことができる。

『秋の村祭りいうたら、もう、何もかもおいておいて、もう祭りだキャーということで。祭りは、どこの祭りでも、わかっている。わかっているけれど、改めてご案内する。それは、手紙やなしに、「祭りやきてやー」ゆうて、来てくれる。ご馳走なんてゆうたら、鶏をしめて。昔はね、お料理。で、その辺の、もう、本当に、心から、まぁどうぞ食べてくれ、まぁまぁそれや、という、この、あのー、しぐさ、語り草という、これはもうあれや。だから、あのー、お招きうけた者も、おおきにありがとー、今日は世話になるけーというふうことで、暮らす。そして、本当に、お祭りを喜ぶ。・・昔は鶏を、あのー、殺して、それで、すき焼きをして食べる。普段は無い。最高のご馳走ですわ。うん。最高のご馳走やから。』

当時は10月17日の神嘗祭に決まった日に行われており、神輿が2基、太鼓が1台でて、旧西国街道に提灯を各家の前に並べて祝ったということである。今では神輿のこぎ手や太鼓のたたき手の確保のために、10月の第二日曜日に変更して行われているが、提灯を街道沿いにつるす風習はすたれてしまった（今でも旧西国街道の路面には提灯をさげる棒を差し込む穴の名残がみられる）。今では祭りでも参加する意識が低く、その背景にはモノが豊かにあることが原因であるとなげく姿があった。

西国街道の変遷に伴う生活の主観的変化をおってみると出生から万博以前は、貧しいながらも「生きがい」を持って生活していて、夏場の草取りなどつらい体験がその後の人生を生きるすべとなっていた。子育てでは姑にいろいろ指示されたなかで育てたり、しんどい時期はあったが、経済的に困った家庭があると地域で金銭的な援助をしたり濃密な人間関係から、精神的、社会的な資源が充実していたと考えられる。ところが万博以降、急激に農地が住宅に変わっていき、農家が少なくなっていくことで地域の人々の生活が一変し、人間関係が希薄化していくことになっていった。

4. まとめ

本研究では地域で営まれてきた生活の記憶をたどるこ

とで昔の暮らしのよさと今とこれからの生活で重視しなければならないことを対象者の語りのなかで見つけていく実践を行った。今回の実践で印象的なことは、ヒアリング対象者の二人ともが、「若い人と話すのはいいもんや」と極めてポジティブに評価していただいたことである。既往の研究でも語ることによる健康増進効果は検証されているが、今回の実践でも同様の効果があると考えられる。

課題としては、住民の語りをどう地域づくりに活かしていくか、語りから解釈したしくみをどう現代的に活かすのかが問われているのは承知しているが、答えは正直見つかっていない。その答えを早急に求めるのではなく、どこにでも当てはまるような標準化した解を求めるのではなく、地域の人々と一緒によき住民の生活像と態度を考えながら、探す態度を土木技術者は必要とされているのかもしれない。東日本大震災の後の復興まちづくりでも住民参加が語られているが、住民のニーズを引き出すのではなく、今回の実践のような地域と寄り添う住民参加を長期間にわたって行っていく必要があるのかもしれない。

参考文献

1) 羽鳥剛史・藤井聡・住永哲史：“地域カリスマ”の活力に関する解釈学的研究：インタビューを通した「観光カリスマ」の実践描写，土木技術者実践論文集，No.1，pp.122-136，2010.
2) 宮本常一：家郷の訓，pp.187-198，岩波書店，1984.

(2011.5.6 受付)